

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 玉藻公園（史跡高松城跡）と弘憲寺を訪ねる

講師 藤井 雄三（高松短期大学講師）

日時 平成31年4月14日（日）



共催

高松市歴史民俗協会

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

目次

1	史跡高松城跡	
◆	築城以前	・ ・ ・ 1
◆	高松城築城	・ ・ ・ 1
◆	松平氏の入部	・ ・ ・ 3
◆	明治維新と戦時中・戦後	・ ・ ・ 4
◆	玉藻公園開園へ	・ ・ ・ 6
2	JR高松駅	・ ・ ・ 7
3	弘憲寺	・ ・ ・ 9

1 史跡高松城跡

◆ 築城以前

安土桃山時代の讃岐は、高松市南部の十河氏や西部の香西氏などを旗頭に小領主が割拠していました。天正十二年（一五八四）には土佐の長宗我部氏により讃岐はほぼ制圧され、翌十三年には四国のほぼ全域が元親の勢力下におかれました。その後、羽柴秀吉の四国出兵により長宗我部氏は降伏、讃岐一国は仙石秀久（せんごくひでひさ）に与えられました。翌十四年の九州出兵における作戦失敗から領地没収となりました。そして、天正十五年（一五八七）には生駒親正に讃岐一国が与えられました。

◆ 高松城築城

天正十五年（一五八七）に讃岐一国を与えられた生駒親正は、翌十六年に高松城の築城を開始し、「野原」と呼ばれていた地名を「高松」と改めました。高松城は瀬戸内の海水を外堀、中堀、内堀に引き込んでおり、日本三大水城の一つに数えられています。本丸を中心に時計回りの方向に二の丸・三の丸・桜の馬場・西の丸の四つの曲輪を配し、さらにそ

の外側に外曲輪が巡っています。本丸と二の丸を囲むのが内堀、三の丸と桜の馬場・西の丸を囲むのが中堀、その外側で武家屋敷の立ち並ぶ外曲輪全体を囲むものが外堀です。城は数カ年で完成したという伝承がありますが、近年の発掘調査成果では、もう少し長期間かけて城郭が整備されていたと考えられています。

生駒親正は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで西軍につき、丹後の田辺城攻めに味方したため、剃髪し、高野山に入ることとなりましたが、子の一正（かずまさ）は東軍につき戦功をあげたことから、讃岐十七万八〇〇石余りが改めて安堵されることになりました。慶長七年（一六〇二）には、居城を丸亀城から高松城に移しています。さらに、一正の跡を継いだ正俊（まさとし）は丸亀の市店を高松に移し、丸亀町を造ったとされています。

生駒氏の治世は四代続きましたが、四代高俊（たかとし）は幼くして藩主の座についたことから、生駒騒動と呼ばれる家臣団同士の争いを招き、寛永十七年（一六四〇）に領地を没収され、堪忍料として出羽国矢島一万石が与えられました。



◆松平氏の入部

寛永十九年（一六四二）、徳川御三家の水戸藩主 松平頼房（よりふさ）の長子であった松平頼重（よりしげ）が東讃十二万石を与えられ、高松城に入りました。頼重は寛永二十一年（一六四四）から城の修築を開始し、寛文十年（一六七〇）にそれまでの三重の天守を三重五階（三重四階+地下一階）に改築しています。現存する天守の写真や絵図から、唐造り（南蛮造り）であることが伺えます。天守改築後は、寛文十一年（一六七一）から北の丸・東の丸の新造を開始し、二代頼常（よりつね）に天守を改築し、二代藩主頼常（よりつね）によって延宝四年（一六七六）に月見櫓（着見櫓）を上棟、翌五年（一六七七）に良櫓を完成させました。また、元禄十三年（一七〇〇）には、三の丸に御殿（披雲閣）が造営されたことに伴い、それまでの御殿（本丸↓本丸・二の丸）と対面所（桜の馬場）に分掌された政庁機能が一体化されました。

その後、城の姿は大きく改変することなく、十一代にわたって高松松平家の治世が明治維新まで続きました。



◆明治維新く戦時中・戦後

慶応四年（一八六八）、高松藩は鳥羽・伏見の戦いで幕府方についてたため、朝廷は朝敵として征討することを命じました。これに対し、高松藩は十一代藩主の頼聰（よりとし）が城を出て謹慎するとともに、重臣二名の切腹をもって恭順の意を示し、城下に陣を構えた土佐藩を中心とした官軍に開城しました。

明治期には外堀は埋め立てられ、外曲輪の市街化が進むとともに、城の北側も埋め立てが行われました。また、中堀より内側の大部分は兵部省（のち陸軍省）の所管となり、城郭建物の多くは老朽化を理由に取り壊され、明治十七年（一八八四）には天守も解体されました。

その後、内曲輪は明治二十三年（一八九〇）に高松松平家に払下げとなりました。十二代当主松平頼壽（よりなが）伯爵は、明治三十四・三十五年（一九〇一・〇二）に、天守台に藩祖松平頼重を祀る玉藻廟を建築し、菩提寺である法然寺の般若台にあった理兵衛焼の頼重像を遷座しました。さらに、大正二く六年（一九一四く一七）



には、三の丸に旧御殿の名称を冠した披雲閣が別邸として建築され庭園も整備されました。披雲閣は、香川県の迎賓館的な存在として、皇族や外国からの貴賓の宿舎・休憩所としても使用されてきました。大正十一年（一九一三）の香川県での陸軍大演習に際しては、披雲閣が大本宮になり、当時の摂政宮（後の昭和天皇）が行啓され、宿泊されています。

高松松平家は、残存していた月見櫓（着見櫓）、水手御門、渡櫓、良櫓、桜御門について昭和十八年（一九四三）に国宝指定の申請を行い、翌十九年には国宝に指定されることに決定しました。しかし、昭和二十年（一九四五）七月四日には、高松空襲により桜御門が焼失してしまいました。一方、月見櫓（着見櫓）、水手御門、渡櫓、良櫓が国宝保存法に基づき昭和二十二年（一九四七）に国宝に指定され、文化財保護法の施行により、昭和二十五年（一九五〇）に重要文化財となりました。

戦時中は、桜の馬場が金属の供出場所として利用されるなど、戦争と無縁ではありませんでした。戦後、高松城跡は連合国軍に接收をされることになり、披雲閣は士官の宿舎に充てられ、桜の馬場な



どこにも兵舎が建てられ、大手前には教会が建てられるなどしました。接收は昭和二十七年（一九五二）のサンフランシスコ講和条約の締結まで続きました。

◆玉藻公園開園へ

戦後の復興が進む中、昭和二十三年（一九四八）には高松城跡は玉藻公園として都市計画決定されました。昭和二十九年（一九五四）に高松市の所有となり、翌三十年（一九五五）に国史跡として指定され、同年五月五日に玉藻公園として開園し、市民が自由に城郭に入る事ができるようになりました。「玉藻」の名は、万葉集で柿本人麿が「玉藻よし 讃岐の国は 国柄か 見れども飽かぬ 神柄か…」と詠んだことに由来するといわれています。

玉藻公園では、桜の時期のお花見や夜間のライトアップ、夏の桜の馬場での映画上映会や、秋には披雲閣においてコンサートも行われるなど多彩なイベントが催され、市民に親しまれる公園となっています。

また、平成二十四年には披雲閣（旧松平家高松別邸）の本館・本



館付倉庫・倉庫の三棟が重要文化財に指定され、同時に作庭された披雲閣庭園が翌二十五年に名勝に指定されました。

平成十八年～二十四年にかけては、天守台の石垣解体修理を実施しました。天守については、平成二十八年から令和四年（二〇二二）年三月三十一日まで、復元に必要な内部の分かる古写真や設計図面等を、懸賞金を懸けて募集をしています。

2 JR高松駅

高松に鉄道が敷かれたのは、明治二十九年（一八九六）十二月です。既に讃岐鉄道株式会社が、明治二十二年（一八八九）五月二十三日に丸亀～琴平間を開業しており、これを延長して丸亀～高松とすることで、明治三十年（一八九七）二月二十一日二月に高松駅が開業しました。当時の高松駅は、香川郡宮脇村西浜（現在の県立盲学校付近）にあり、「西浜ステーション」とも呼ばれていました。その後、



明治三十七年（一九〇四）に山陽鉄道に移管、さらに明治三十九年（一九〇六）に山陽鉄道の国有化により、国有鉄道の駅となりました。

高松駅は、明治四十年（一九〇七）に宇高航路が運航を開始したことにより、明治四十三年（一九一〇）七月一日に新湊町（現在の浜ノ町）に移転し、二代目駅舎の使用が開始されました。新駅舎への移転にあたり、線路も当時の海岸線沿いを高松へ向かう現在のルートへと変更されました。その後、東へ〇・三キロメートル東に移転し、三代目駅舎の使用が開始されました。使用停止となった二代目駅舎はそのまま残されましたが、鉄道記念物への指定及び保存が検討されていた矢先の昭和三十五年（一九六〇）年八月に火災のために焼失してしまいました。

瀬戸大橋開通に伴う平成二年の宇高連絡船の廃止により、失われた高松港の拠点性の再興、国際化、情報化に対応した新都心づくりをするべく「サンポート高松」事業が計画されました。この事業により、平成九年に三代目駅舎の使用を終了し、西へ〇・三キロメートル移転した現在の地で、平成十三年五月十三日から四



代目高松駅の使用を開始し、今も四国の玄関口としてまちの発展を支えています。

3 弘憲寺

弘憲寺は、高松市錦町二丁目に所在し、高野山真言宗に属します。山号は利剣山、院号は遍照光院です。讃岐国主 生駒親正の菩提寺として知られています。

縁起によれば、日本武尊の悪魚退治の後、天平年間（七二九～七四九）に行基が阿野郡福江浦に魚霊堂を建てるとともに、法勲寺を建立したとあります。その後空海が玉井村讃留王の塚上に移し、鎌倉時代までは存在していたとされますが、その後廃寺となり、本尊・霊宝を近くにある島田寺（綾歌郡飯山町）に移したといわれます。この島田寺も兵乱により焼失の憂き目にあいましたが、天正十五年（一五八七）に生駒親正が讃岐の国主として入ることにより、大きな転機を迎えました。

生駒親正は、讃岐が空海生誕の地であることから密教に帰依するとともに、島田寺主の良純を敬って法勲寺を再興して良純に寺務を執らせました。慶長八年（一六〇三）二月十三日に親正（諡 弘憲公）が没すると、高松西濱に葬られました。同年、親正の息子である一正により、法勲寺が親正の塚上に移され、弘憲寺と称するとともに、良純を初代住職と

しました。同時に、島田寺領五十石を弘憲寺に付すとともに、古画・名器を移し、島田寺を弘憲寺の末寺としました。藩主が生駒家から松平家に代わっても、江戸時代を通して寺領は一定していたようです。

寛永十九年（一六四三）に松平家が入部した後、『真言宗高松弘憲寺記録』（明治二年〔一八六九〕）によれば、初代松平頼重の時代に早魃（かんばつ）があつた際、領内で弘憲寺のみに降雨の祈祷が命じられたり、一郡一か寺のみ選ばれる五穀成就の祈祷も仰せつけられたりするなど、松平政権下においても重要な役割を担っていたと考えられています。なお、慶応四年（一八六八）の鳥羽・伏見の戦いで幕府側についた高松藩が朝敵となつた際、二人の家老に切腹を命じ、首を差しだすことで戦火を免れましたが、その家老の一人である小河又右衛門が切腹した場所は弘憲寺でした。

平成二十八年、生駒親正が身に着けたとされる甲冑が秋田県由利本庄市の龍源寺から寄贈され、三百七十六年ぶりの里帰りとなりました。甲冑は、平成二十九年二月二十一日から四月九日まで



市歴史資料館で展示されました。

◆ 国指定重要文化財

・ 木造不動明王立像

・ 密教法具（金剛盤一面、六器六口、火舎一口、飯食器二口、灑水器〔しゃすいき〕一口、塗香器一口）※東京国立博物館へ寄託

◆ 県指定有形文化財

・ 木造地藏菩薩立像

◆ 県指定史跡

・ 生駒親正夫妻墓所

◆ 市指定有形文化財

・ 生駒親正肖像画

★ 参考文献

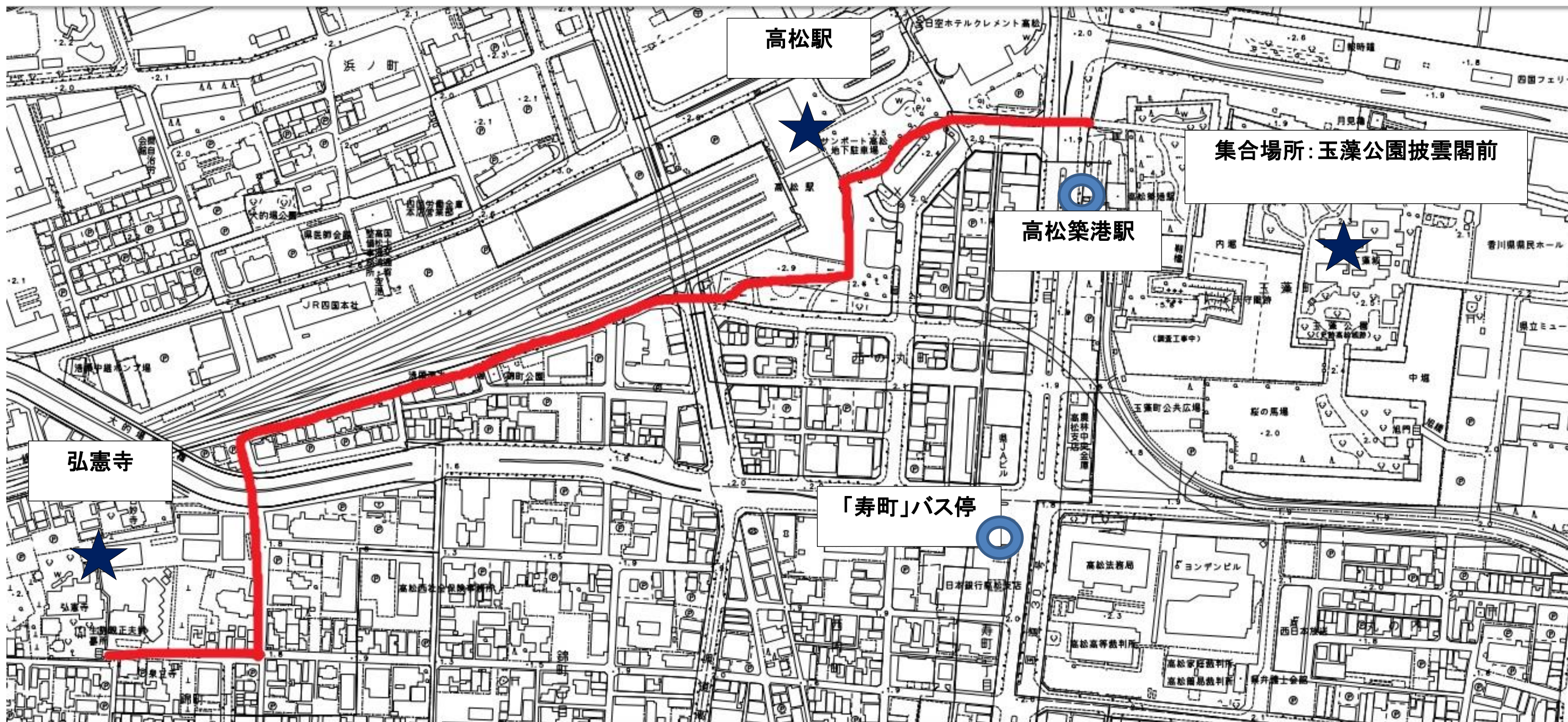
・ 『史跡 高松城跡』平成二十六年、高松市

・ 『新州 高松市史』『昭和四十一年、高松市役所

・ 『第十九回特別展 弘憲寺の名宝展』平成十年、高松市歴史資料館・高松市

**M
E
M
O**

ふるさと探訪「玉藻公園（史跡高松城跡）と弘憲寺を訪ねる」探訪ルート



4月14日（日）復路（最寄り）

▼ことでん：高松築港駅

▼JR：高松駅

▼バス：寿町バス停

❖ 次回のふるさと探訪は…

◎テーマ：「**レインボーロードの成り立ち**」（予定）

◎と き：令和元年5月19日（日）午前9時半～正午

◎集合場所：熊野神社（松縄町）

◎解散場所：伏石中央公園（伏石町・野田池の南側の公園）

◎講師：高上 拓（高松市文化財専門員）

◎探訪先：天満・宮西遺跡、松縄下所遺跡、野田池、
キモンドー遺跡、佐藤城跡など。

（周辺の遺跡の変遷や条里の地割等から、古代から現代の都市計画についてレインボーロード周辺を歩きながら考えます。）

◎参加費：無料

★公共交通機関の御案内

ことでんバス **65**レインボー サンメッセ 川島・フジグラン
「アキ歯科医院前」下車、徒歩3分

瓦町（2番のりば）（8:48 発）→アキ歯科医院前（9:00 着）

★注意

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」5月1日号に開催案内を掲載予定です。

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうか御不明な場合、午前7時30分～9時30分に文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。